

第2次 熊本市食の安全安心・食育推進計画策定に係る

第2回計画策定部会（食育推進） 議事概要

| | |
|------|---|
| 開催日時 | 平成24年10月10日（水） 14:00～16:00 |
| 場所 | 市役所別館自転車駐車場8階大会議室 |
| 出席委員 | 12名（五十音順・敬称略） 秋吉澄子、石井孝文、伊藤大介、江頭隆一、川瀬修一、木村彰宏、清川光乃、清田賢治、上妻美由紀、小山和作、中川朗子、森田啓二 |
| 傍聴者 | なし |
| 次第 | 1 開会 2 主催者挨拶 3 議題1 熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート結果報告 議事2 第2次熊本市食の安全安心・食育推進計画素案（食育の推進）について 議事3 その他 4 閉会 |
| 会議資料 | 資料1 熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート結果（成果指標の状況等）【食育】 資料2 第2次熊本市食の安全安心・食育推進計画（素案） 資料3 第2次熊本市食の安全安心・食育推進計画に基づく、関係課・団体の役割およびアクションプラン（取り組み）について（案） 資料4 第2次熊本市食の安全安心・食育推進計画 成果指標【食育】 |

議事録（要旨）

【議事進行】 部会長 小山和作

《小山部会長》

食えることというのは大変大事なことというのは、誰でもわかっていることだが、どうあるべきかということになるとさまざまな意見がある。非常に厳しく言う人もいれば、とりあえず腹に入れば良いと言う人もいる。近年、特に学校教育の現場でも体育だとか徳育だとかと同時に食育という言葉が使われている。食育というのは、食で育つという意味と受け止め、子どもたちの話と思っている大人もいる。しかし、最近は大変、特に高齢者の食べ物のトラブルも多く、独居老人など一人住まいの方は十分なことが出来ないため、体力・健康面・免疫力が落ちて、いろいろな病気の原因にもなっている。例えば、東京の女子栄養大学は介護施設で実習をしている。なぜ栄養士が介護の実習かというと、今まで寝たきりに近い状態だった人がどんどん元気になって中には座るようになった、立って歩くようになった人もいるということで、介護の治療にもなりえるという、食べ物はそういう力を持っているということも証明されてきている。若いも若きも「食べる」ことは非常に大事だということである。それを全部合わせて「食育」ではないかと思う。国も医療費や介護費の節約にもなるため力を入れている。人は元気になれば生きがいも生まれてくるし楽しい人生があって、ひいては明るい社会を作ることができるということにつながる。

「食育部会」としての会議は今日で終わりなので活発なご意見を賜りたい。

それでは議題1、2と続けて事務局に説明をお願いしたい。

《事務局》

議題1 熊本市食の安全安心・食育に関するアンケート結果報告

議事2 第2次熊本市食の安全安心・食育推進計画素案（食育の推進）について 資料説明

《小山部会長》

皆様からご意見・ご質問はないか。

《森田委員》

私の専門分野ではないが、アンケート結果の6ページ、「健全な食生活を実践する為の環境整備」の成果指標⑩、「日本型食生活を実践している市民の割合」が80.4%という数値になっているが、この日本型食生活というのをどのようにとらえて回答されているのかお尋ねしたい。学校で子どもたちに朝食に何を食べてきたかを聞くと「パン」という答えが結構多い。「ご飯と味噌汁」と答える子は半々かそれ以下なので、この結果についてどうとらえたら良いか。

《事務局》

アンケート結果報告書の259ページの間15に「あなたはふだんから次の各項目について実践していますか」という問いがある。「①栄養バランスのとれた『日本型食生活』の実践、野菜摂取量を増やす、油の多いものを控えるなど、栄養バランスに気をつけている」という問いの説明の中に「日本型食生活」とは、主食である「米」を中心として、大豆・野菜・魚などの副菜を組み合わせたものに、畜産物や果物などがバランスよく加わった食事パターンをいう」という記載があり、それを読んで回答者が丸印をつけるようになっている。意識調査なので、委員ご指摘のとおり、朝はほとんどがパン食という方でも、夕食のときはご飯でおかずがそろっていることが多いのであれば、その方の回答は「必ず」とか「しばしば」に丸印がついている可能性はあると思う。

《小山部会長》

朝食は様々で、食べてはいるがジュースで済ませる人も多いと聞いている。ほかに何かないか。

《石井委員》

メタボリックシンドロームを認知を熊本市は8割程度の方が認識されているというのは非常に高いと思う。

《小山部会長》

最近は何を見て「あなたメタボじゃない？」ということもあり、認知の程度は全国的にも上がっていると思う。メタボというのはおなかが出ているだけではないのだが、内容まで知っているか？というところだろうか。しかしテレビの影響もあるし、皆、メタボという言葉は知っていると思う。

《中川委員》

石井委員もおっしゃったようにいろんな情報を通じてメタボに関する知識は皆さんに浸透していると思う。特にこれから一番懸念される40代、50代の男性層の方々も自分自身のことだと思って不安を抱えているが、その世代の方というのは（市役所もそうだと思いますが）とにかく忙しくて責任もあるし残業は多い。効率良く片づけて帰ろうとすると職場の雰囲気やそれを許さない。また民間ですと、こういう不景気のときに定時や定時ちょっと過ぎに帰ると白い目で見られるという悩みを聞いたことがある。大学生や職場に対するアクションプランがきちんと決められてるのはとてもいいことで進めてほしいと思うが、熊本には大企業が少ないので中小企業などの職場環境が夜九時に帰宅できれば良い方で、それから風呂に入って夕食をとると夜十時を過ぎて、あとは1、2時間で寝てしまうので結局腹回りは小さくならないという方が結構多いと思われる。そういった職場に対するアクションプランのモデルケースなどを作って広がりをもってやっていくということも必要かなと思う。意識しても個人の努力だけでは働き盛りの人などはどうしようもない方もいるし、経済状況などもあるので、本人を支援する

意味でモデルケースなどが出来ないかと思う。

《小山部会長》

中川委員の話のように社会環境が変わらないと個人の努力ではなかなか出来ない部分もある。私たち医師も食生活の指導をすると「お医者さんは説教すれば済む。ああしろこうしろと言えば商売が成り立っていいね。自分たちの商売はそんなわけにはいかない」と言われ、一向に聞こうとされない人もいる。つまり、責任は自分たちじゃなく社会にある、会社にある、経済状況にあると言われて、なかなか食育が徹底しにくい。意識がなくて出来ないという人をケアするというのは意外とやりやすいが、わかっているが出来ないという人をどうアクションプランに持っていきかが重要である。事務局の考えをお聞かせ願いたい。

《事務局》

市としては今後、校区単位の取り組みを強化したいと思っている。地域の中での健康づくりの意識の醸成を図り、さまざまな地域の活動の団体の皆様と協働で地域の健康課題を提唱させていただきながら、健康についての意識を持っていただくような取り組みや働きかけを始めているところである。また、その職域の方に対しても今年度別計画で「健康くまもと21」という本市の健康増進計画の見直しを図っているところ。その中で協会けんぽなどと、職域と地域の連携の中で、対象となられる方々へ検診の受診勧奨や健康情報等の発進ができないかと考えている。

《木村委員》

会長の発言にもあったが、アクションプランを実際に進めていくことが実際の職域の理解につながっていくと思う。根本的な話になるが関係者団体の役割というところを見ると、区割りが消費者、生産者、食品関連事業者、教育関係者、行政だが、例えばお年寄りのことを考えたときには、そこに社協や食改の皆さんなどが重要な位置を占めていると思う。つまり、ここにもうひとつ具体的に動くことができる人たち、自主的に活動できる人たち、例えば行政の方が指導されるという形での書き込みになるかもしれないが、実際、核となって動く人たちの位置づけを明確にすると、より目標に向かって進むことが出来るし、皆が何をやればいいのかということが明確に意識づけできるのではないかと思う。

《小山部会長》

木村委員が言われたことは確かに重要である。実際に大きく関わっている人達をアクションプランに参画させることが大事である。ただ単に行政の指導だけでなく、自らの役割、テーマとしてとらえながらやっていくということが大事である。

《事務局》

先程の説明とも重なることもあるが、市の方向性としては地域住民の皆さんと協働でというスタンスで健康づくりについては進めていきたい。その中で先程出た社協やボランティアの組織と一緒に校区的健康事情・健康課題を共有し、食育についても進めていくことができると思う。そういう意味ではより細やかな部分が出てくると思う。熊本市も政令市になったが中心部と近郊部においては産業構造、世代構成等も異なっており、さまざまな地域事情に応じた形での取り組みは区が中心となり、地域で食育を進めていきたいと考えている。

《小山部会長》

是非それをお願いしたい。

引き続き、企業・大学における食育推進の話をしたと思う。企業には安全衛生委員会のようなものがある。大きな企業になると保健師や健康を専門にするスタッフがいる。大学にも保健室があるが学生の健康に関わっているとは思えない。具合が悪いときに薬をもらう場所であって、食育に関して関わってるところでは無いように思う。秋吉委員にお尋ねするが、大学としての取り組みや食事はどうか。

《秋吉委員》

尚綱大学は11月に学園祭があり、その中で短大の学生が展示と栄養指導の研究発表を行っている。また、その学園祭に来られた他の大学の学生に対して本学の学生が栄養指導をしている。男子学生の中には食に無関心で、体格的にも細身の方が多いように感じている。朝は食べない、一日一食という方が結構多い。大学間のネットワークというものがあれば管理栄養士を養成する施設として他大学に栄養指導とまではいかないが、講座の開催や、集団指導を行う等の企画ができると思う。

《石井委員》

栄養士会の役割としては、食生活改善をサポートする人材の育成に関する項目のところ若干書いているが、健康教育相談を行うケアステーションの充実・PRを行っている。今後はこの栄養ケアステーションに気軽に相談できる場所を整備していきたい。また、食環境の整備については、外食の栄養成分表示について熊本市の委託を受けて取り組みを行っている。他にも、いろいろな研修会等の取り組みなど行政と連携して実施していきたい。

計画が実効的になっていくためには大変財政難の時代ではあるが、物・人・金の三つが揃っていないといけない。計画の目標達成のための取り組み手法として、熊本市では小学校単位でまちづくりの中で健康づくりを進めていく。食育を進めていく。という大きな枠組みが出来ているので。そこにどれだけ人が対応できるのか、どれだけものが整備されているのか、そこにどれだけ予算が確保されているのかというのが非常に重要になってくる。周知から実践へということになれば、特に実践力を身につけさせるためにはそういった体制作り、整備が大事だと思う。私ども栄養士会もぜひ協力していきたい。

《小山部会長》

政令指定都市になって区ができたが、区ごとに栄養ケアステーションというものを作ると良い。団体の役割の中に県栄養士会は健康・教育・相談を行う「栄養ケアステーション」の充実・PRを行うと書いてあり今後を期待する。

秋吉委員の学校だけではなく、栄養の学科は県立大学もある。学生自体の問題もあるが、その学生が例えば地域社会に出ていき何か行動する。例えばグループを作って協力していくなど、校区ごとに何かをやるというときにそういったことに出て行くということとはできないだろうか。

50年ほど前、今の県立大学、女子大の中に生活科学班というものがあつた。地域の皆さん方のために勉強し、栄養学を提供したり社会に入り込んで地域から学ぼうという人達だった。教育学部は教育を、法律は法学部の学生がやって地域の中に根ざした活動がかつてはあつた。そういったものを活用しながら熊本市で運動を起こすと学生たちは非常に目覚めていく、その人達が与えた影響が将来の熊本市のためになるのではと思う。

《事務局》

例えば、地域には子育てサークルが150くらいある。そこには主任児童員など、運営に携わっている人がいる。今でもそのサークルの中で食べ物の話になったときは食改さんと協力して教室を実施するなどしている。各校区の保健師は主任児童員さんと連携しているので、その保健師が医師や栄養士などの関連職種と調整をしながら対応するという事はある。組織があるわけではないが要請があれば今の既存の枠組みの中でも対応できる。

《小山部会長》

秋吉委員にお尋ねしたい。

先程、学園祭の中で他の学校の学生が来て、しかも関心が高いということを言われた。自分たちもなにかやりたいという気持ちがあるのではないかと。最初に話した女子栄養大学の取り組みは、大学が地域

と連携した事業である。行政と学校と地域が一つになって取り組む食育という問題は産・官・学・民が一体となってやらないといけない事業だと考える。

《伊藤委員》

アンケートの報告書を見たが、これだけのアンケート調査は相当に大変だったと思う。市と担当の方々の熱意が伝わってきた。アンケートの目的であるニーズと課題、問題点を把握するということは考察をみる限り達成できているのではないのかと感じた。推進計画に関しては食育推進計画自体のコンセプトが「周知から実践」ということで見せていただいたが、すぐ取り組めるようなアクションプランが書いてあり、大変スムーズに取り組めるように思う。

幼稚園としての協力は、世代間をつなぐ健康づくり、関係機関への働きかけや連携、また、男性に対しての働きかけ、子ども自身やそのお父さんに対して、また、おじいちゃん、おばあちゃんに対しての啓発なども協力できる。実際、前回の会議の後、各幼稚園に協力体制および取り組みの成果指標に何が良いかなどのアンケートを取っている。その結果、連携先を知らないという課題がでてきたので、今ここにいらっしゃるような方々と幼稚園や保護者の方々が集まる会があると、スムーズに意見交換ができ、連携も進み、アクションプランに関しても具体的なものがさらに挙げやすくなるのではないかと思った。

《上妻委員》

前回、会長が保育園では標語などがあり子どもたちがそれを覚えるということを言われたが、その後考えたとき、幼保小中高大、社会人全部を取り込んだ食育のプランがあったらいいのではと考えた。保育園児には標語を作るのは難しいが、耳で聞いたことを覚えるというのは得意なので、小中高生に食育の標語を作ろうと投げかけて、その標語を小さな保育園の子ども達が覚えて、実行することもいいかと思う。例えば消防関係で「おかしも」という言葉があり、「お」は「おさない」、「か」は「かけださない」、「し」は「しゃべらない」、「も」は「もどらない」という合い言葉を覚えている。

先ほど石井委員が栄養ケアステーションを作るというプランがあつて予算の話がされたが、予算がなくてもボランティアならできることがある。うちの園の場合だが、肥満傾向の子、やせ気味の子、どちらも多い。親として心配なのは自分のうちの子どもはどうなのか、栄養をとりすぎているのか、少なすぎるのではないかと思う。しかし、カロリー計算をしたくても素人にはわからない。どうしたらわかるかを考えた時に子どもは一日何キロカロリー必要か、お茶碗いっぱい何キロカロリー、昼食に保育園では何キロカロリー食べているから、お家ではこんなバランスで食べたらいいですよと、肥満傾向のお子さんのカロリーを計算してみましようといったボランティアサークルを作り、また、多くの人にそういったボランティアサークルがあるということを知らせることも必要だと思う。例えば、食改さんの存在を私たちは知っているが、この前テレビで食改さんがある高校でお芝居をして野菜の大切さ、食の大切さを面白おかしく見せていたのを見ました。是非うちの園でもそういうのを見せてあげたいと思うが、どこに問い合わせればいいのかわからない。食改さんは以前クッキングで来ていただいたことがあるが、お芝居とか子どもたち向けの引きつけるような特色あるものを大々的に教えていただけたらもっと活発になると思う。

また、保育園関係は1月に研修会を計画している。講師は、お弁当を子どもたち自身が作るということに取り組んでおられる先生で、これまでも何回目か来ていただいたが、たいへん刺激をもらえる。他にも、熊日新聞に玉名市で「お弁当を僕たちが作ったよ」という記事載っていた。2回ほどそういった記事を読んだことがあるが、そういうことを小学校や中学校で取り組んではどうか。自分で作るお弁当、自分で詰めるだけでもいいのではないかと思う。

他にも、行政の方からも会長がおっしゃったように大学側に協力してくださいという呼びかけをしたらどうだろうか。

《小山部会長》

保育園は幼稚園と違ってお母さんがお勤めの方が多いため、家庭での食育というものについて時間がない人が多いと思うがどうか。

《上妻委員》

お母さんたちも作りたくても時間がないので作ってあげられない、そういう意味では保育園の給食というのはとても重要だと思う。保育参観の時に実際に子どもたちが食べている量を食べてみるという機会を年に2回作っている。その時は特に保育園らしい食事を提供するようにみんなで話し合っている。また、そのレシピを必ず配ることにしている。お母さん方は作ってあげたい気持ちはあるがなかなか時間がないといわれる。他にも、子どもがリクエストした食事を作ってあげたらとても食べてくれました。野菜は食べない子なのに保育園のレシピを作ったら食べてくれましたとの声を聞くことがある。今回のアクションプランの中にレシピの配布ということが入っていたが、良い取り組みだと思う。

他にも郷土料理の中でレシピ作成と書いてあったが、個人的な意見としてぜひ検討していただきたいのはレシピはもちろんそれにまつわる命名の由来や、どうしてこういうものを食べるのかということ、なぜ熊本だけにこれがあるのかという理由をつけてレシピと一緒に出していただけたらと思う。

《小山部会長》

いろんな工夫があると思うが、幼稚園も保育園も年少組の子たちというのはお母さんが連れていっても泣いてなかなかお母さんから離れないという姿をよく見かける。お母さんと離れたくはないけど行くとおいしい給食が食べられる。ということになればと思う。

《森田委員》

先程保育園の方から自分たちで弁当を調理するという話があったが、本校も年に3回ほど各家庭の中で保護者と一緒にお弁当を作る日ということで、お弁当の日の取り組みを実施している。それぞれの家庭で段階を設け、すべて自分で作る、おかずだけ作る、買い物をする、作ってもらったものを自分で詰める、作ってもらって感謝をするという5段階でそれぞれの家庭にあった方法で、給食がない遠足の日などにそういった取り組みをしている。旧市内の学校でも実施しているところがあるのではないかと思う。親子のふれあいもできるし、お家の方への感謝や、なぜこれを作るのか彩りなど自分で作るということへの一歩で本校として取り組んでいる。子どもも喜んで作るし、また、その日は全部食べてしまっただけで残すことも無い。家庭へ食育の啓発という意味でもいい取り組みだと思う。

子どもたちの食育というのは、学校には給食があるためお昼はしっかりとした栄養管理のもとに栄養の行き届いた食事を取っているが、どうしても朝食をとってこない子どもも減ってはきているが中身をみると家庭によって課題があるということを学校として認識している。例えばパンだけ、甘いものだけ、そういった朝食をとってくる子どももおり、課題としてとらえている。

学校の場合、成果指標にあるそれぞれの学校で食育についての計画は100%できており、各学校それに則って食育を進めているところだが、朝食の場合は、家庭の協力、家庭の食育が子どもたちにとっては重要だと考える。食事の3分の2は家庭なので家庭での食育の推進というのはどうしても欠かせない。この計画では「家庭における食育の推進」という大きな柱が立てあるので学校としてもありがたい。

また、次期計画の成果指標に、保護者への啓発ということで「授業参観・懇談会等で保護者への食育の啓発を行った学校の割合を増やす」という項目となっている。この指標は学校としてもっとご家庭の方に働きかけをしていかなければいけないということで、良い指標だと思う。

《小山部会長》

学校には給食があるが保護者から給食ことでのクレームをつけてくる人がいるということで話を聞いたことがあるがいかかがか。

《森田委員》

私自身はそういったクレームを受けたことは無いが、他の先生から聞いたことはあるので、中にはそういう保護者もいらっしゃると思う。

《小山部会長》

教育の現場にはさまざまな保護者がおられるが、食育という点ではそういった保護者に対して「今、この子に必要です」ということを説得しないとイケない。そのあたり先生として苦勞されているのではないかと思うがそういう場合は現場の栄養士が説明しているのか。

《森田委員》

学校の給食についての理解を得るためには、担任が話したり食育担当が話したり場合によっては管理職が話をする場合もある。

《小山部会長》

なぜこんなことを言うかということ、やっぱり保護者と話すことが大事で、一方的に決めつけなくてよく聞いてあげることは若い栄養士さんには無理なのかもしれないが、じっくり聞いてあげる必要があると思う。最近の日本人は徹底して話すということが少ない気がするのでコミュニケーションを本気でやっていくということが必要だと考える。

《清川委員》

食生活改善推進員として、先程こちらの保育園の先生の方からお話があったエプロンシアターなどこちらに連絡したらいいかということに関して、この資料、下段の食育に関わる団体の熊本市子ども食育推進ネットワークへの加入を促進ということが書いてあり、加入者の方たちには私たちの活動を伝えている。各区役所にも栄養士さんがおられ、エプロンシアターなどの媒体があるので、その校区の方はその区の栄養士さんに言われると、そこから食改に連絡があり、日程さえわかればボランティアですぐ出向いていく。

他にも、6月の食育月間からずっとイベントで私たち活動させていただいている。10月は13日、14日に健康フェスティバルに出展するが、来られる人は毎年顔見知りになるくらい顔を出されている。参加者には「豆はこびゲーム」とか「食事バランスガイド」の話などをする。また、10月20日、21日はグランメッセで元気フェスタに参加、10月27日、28日は農業公園、11月は新市街で農産物フェアでレシピを配る。外に出てくる方には目が届くが、家に閉じこもっている人にはなかなかできない。他にも、92の小学校校区単位で、すこやか食生活改善講習会という生活習慣病予防の料理というものを市から委託を受けて実施している。これも、知っている人は知っているが、勤めてらっしゃる方など全然縁のない方にはなかなかできない。

《小山部会長》

確かに市役所もどんどんPRしていかないとイケない。

先の学校へのクレームについて、PTAとしてはいかがか。

《江頭委員》

クレームについて、そういった話を耳にすることはあるが本校の場合も実際に起こったという話は聞いていない。やはり保護者の方々にもいろんな方がおられるので、一つのことを始めようというときにはなかなかスムーズにはいかない面はある。しかし、こういうことを進めていくことは学校の中では保護者抜きでは活動できないので保護者のやる気を起こさせるというのが一番なのかなと感じている。

また、成果指標、アンケートの中にもあったように、当校も学校の農園で子どもたちが一生懸命農作業をやっている。先日枝豆の収穫を行い、分けて家に持って帰ったが非常に子どもたちは喜んでいて。自分たちが一生懸命植えて水をやって育てて収穫できたという喜びを学校の中で教わることができた

わけだが、根底は家庭だと思う。なんでも学校でというのは限りがある。

先程上妻委員からもお話があった九大の先生は、去年私ども PTA の方でも九州 PTA 大会で講演をされた方ではないかと思う。九大の自分のゼミの学生を対象にいろいろなことを研究された話で、例えば、大学生になるまで料理をしたことがないため、インスタントラーメンの作り方を聞かれて、インスタントラーメンは簡単だからインスタントなのにそれをもっと簡単にするなんてできるわけがないということで、たいへん面白い話しであった。森田委員の小学校でも今お弁当作りをやってらっしゃるといふことで非常に良い取り組みだと思った。また、その九大の先生が言われることに、子どもがたまたまお母さんにお弁当を作ってもらって「お母さんにお弁当おいしかった、これどうやって作るの?」と言ったときに、これは冷蔵庫から出してチンとすればできるんだよということじゃいけない。お母さんがいるんなら方法で作ってあげると子どもたちもこうやって作るんだという料理の楽しみ、食べる楽しみが味わうことができる。そういうことを知る意味からもお弁当を自分で作るというのは非常にいいことで、まずは家庭が大事なのではないかと思う。

また、食育に関しての認知度について男性の認知度が低いというアンケート結果が出ていたので、私たちの世代だと男子厨房に入らなければならないというのはいまもう死語になっており、これからはどんどん男性へのアプローチをしていくと良いと思う。料理教室への男性の参加が増えており、リタイアされた方が何かしようというとき、奥さんと一緒に買い物に行って自分も料理をやってみようというのわかるが、現役の方というのはなかなか難しいと思う。休みに買い物して料理をすることができる方は少ないと思うが、男性の料理への関心も高くなってきているので、普通のお勤めの方に対して、また子どもたちも含めて、家庭ぐるみで取り組みができればと思う。

《小山部会長》

食材を自分たちで作ることによって興味がわいて非常に良いという話が出たが、その食材そのものを作るということについては、大変難しい問題だと思うがいかがか。

《清田委員》

学校給食に関して、学校から要望があった場合、例えば今日給食で蓮根を使いますというときに生産者を派遣して蓮根の説明を受けたり、豆腐を食べる場合に大豆の説明を受けたりすることがある。そういう時には私ども JA を通じて生産者を学校に派遣するボランティア活動をしている。女性部の若妻さん、女性部の方、ハイミセスの方、特に高齢者の方々の元気にいかに活用するかということで、今年は高菜の種を蒔いて 11 月下旬に移植して来年の 4 月には高菜漬の講習会の計画を立てて実行しているところである。今後、だご汁など伝統料理に関しても、要望が来たらそういう方々を派遣して行政と一緒に活動をやっていききたいと思う。

また、今後地域づくりの核になってくるのは以前から住んでいる方、農業をしている方々なので、その方たちが核となって地域づくりを進めていかないと熊本もなかなか活性してこないと思う。幼稚園の農地で何か作物を作る活動も農家の方々と一緒になって幅広く取り組んでいく、というのを前提として今 JA も動いているところ。

《小山部会長》

本当にたくさんの立場があると思うが、川瀬委員は何かございますか。

《川瀬委員》

私たち熊本連合会は県内に 7 組合あり、実際に活動している 6 組合で、今特定検診、特定保健指導が、25 年度から 2 次がスタートする中で特定保健指導を共同事業でやっている。それと周辺事業といって 20 代、30 代、それから特定保健指導に該当しない通院している人、投薬を受けている人などを対象に事業所に保健師さんや管理栄養士さんを派遣し、そこで指導をするということをやっている。共同事

業の中でやっているため、予算をオーバーした分は組合さんが負担しなければならないが、熊本連合会が昔から実施している事業である。また、各組合のセミナーで料理教室なども実施している。これは奥様方を中心に1回30名くらいなので、全員が一度に集まるといことはでない。それ以外で食育の教育というのはなかなかできていない。保健師さんの巡回指導の中で必要であれば管理栄養士さんとペアで行ってもらいそこで指導するというは実施しているが、ここにある企業・大学等での食品に関する講座の開催などを今後取り入れていただければ大変ありがたいと思う。

それから先程ボランティアという話があったが、ある大学の先生と話した時、学生の教育実習の一環で担当の先生とペアで企業に行き、そこで社員の人の健康相談をすることができないだろうかという話がでた。これには担当の先生と一緒に活動するというので、連合会としても考えていますが、なかなか難しい状況である。

《小山部会長》

他に何かないか。

《中川委員》

資料4（黄色い紙）に地域の元気な高齢者を活用して人材育成すると書いてあるが、本当に地域には元気な方々がたくさんおられるので実現してほしい。例えば民生児童委員さんと同じように食育委員とか食育推進員と名称をつけ、その方に地区社協の中や校区の自治会の中で委員になってもらう。それは順番で委員になってもよいと思う。そこで、年に1回か2回必ず区役所の栄養士さんか本庁の栄養士さんとか関連の方を招いて食育に関するお話を聞く、調理実習をするということが定着していくと、その人々の意識も高まるし、食育にもなる。これから高齢者はどんどん増えるばかりなのでどうだろうか。やはり肩書はあった方が役割になった方も動きやすいし、取り組むときもスムーズに進むかなと思う。名称に関しては愛称でも良いので食育委員さんはどうかと思う。

《小山部会長》

清田委員の言われた、農協の65才以上のというのは75才以上でも良いのでは。農業をやるには少し足腰が弱ったが口はまだ達者という方にどんどん助けてもらうと良いのではないか。また、伝統食については65才以上より今の80代の人たちにどんどん話をさせていかないとなかなか進まないと思う。

《木村委員》

食と環境が絡む話だが、去年1年半くらい前から阿蘇の草原特集というのをずっと担当している。阿蘇でも阿蘇の赤牛というのが昔からあるが、子どもたちに絵を描かせると20年くらい前まではみんなほとんどが赤牛を描いていたが今は黒牛やホルスタインなどで、赤牛を描く子どもがすごく減ってしまった。昔は家一軒に牛一頭飼ってあったが今はそういう風景はなくなってしまって子どもたちが自然や食を生み出す環境になくなってしまっている。

また、先程の清田委員の話だが、高齢者あるいは学校に行って蓮根の作り方や大豆の栄養のことについて話をされるというのは非常に新鮮である。私の住んでいる校区はほとんど畑も田んぼもないため学校でも水前寺もやしの水耕を見に行ったりということもあるようだが、そういうことをJAがされていることをどこかでまとめ、どの学校でも共有するというシステムを盛り込んでいくと良いと思う。これらのことを取り組んでいかないといけないといけなくて、これまでの阿蘇の草原の取材をしていて痛感している。皆さんのお話を聞いて熊本でも進めていくことができるのではと思った。

《小山部会長》

熊本市で地産地消というと熊本市でとれたものを熊本市で消費してということになるが、そんなわけにはいかない。熊本市の水は阿蘇からくるわけで、あまり熊本市にこだわらなくてもいいかと思う。

《秋吉委員》

今回のアンケート結果、全体的な印象として平成19年に対して24年で悪くなっているところもあり残念に思うところもあるが、国の方針にもなっている「周知から実践へ」がやはりキーワードになってくると思う。アクションプランにあるいろいろなイベントや環境整備についてももちろん大事だが、参加する人は興味のある人という現状がある。今後は食育に関心のない人にいかに興味を持ってもらうかという動機づけも必要である。意識の無い人への積極的な介入をアクションプランの中に入れていく必要があると感じる。

《小山部会長》

皆様方に最後にお聞きしたい。この素案に根本的に反対という方はいないか。細かい点についてはいろいろあるかと思うが前回の皆さんの意見も含め、事務局で十分に検討した上で、さらに磨きながら次の全体会議の時にパブリックコメントを反映した計画案が提出されると思う。基本的に、この部会でいろんな意見を出したので基本的には賛成という形でよいのではと思うがいかがか。

《全員》

異議なし

議題3 特になし